



Medical Excellence
JAPAN 理事長

近藤 達也

こんどう・たつや 東大医卒、国立国際医療センター病院長などを経て、08年医薬品医療機器総合機構（PMDA）理事長。「レギュラトリーサイエンス」（規制科学）を推進し、わが国の医療改革に貢献。19年から現職。77歳。

人生100年「ニューオールド」への期待 —— 知的・革新的パワーの源泉に

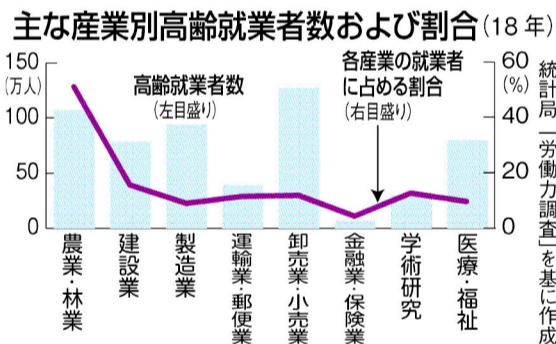
講壇

人生100年の時代、それは個人にとつては長いスパンの人生計画が求められる、より大きな希望を抱ける時代の到来である。その半面、少子高齢化による社会のひずみをいかに克服するかも大きな課題。高齢社会をいかに実りあるものにできるのか。私は長寿時代における新たな担い手として、「ニューオールド」と名付けた世代に期待したい。

人生100年時代は、19世紀から20世紀にかけての地下資源エネルギーの開発、それに対応する科学技術の劇的な発展の結果、先進国はいち早くその果実を得ることができた。また、目覚ましい医学・保健・衛生の発展により、今日の長寿時代もたらされている。

その半面で、少子化は歯止めがきかない。日本は高齢社会の最先進国といわれて、少ない若者が高齢者を支えていくことになる。スマートな政策対応が求められており、健全な合理的な解決策が迫られている。もちろん個人の意識改革が最も重要になる。少子化に有効な解決策が見いだせない中、今後の高齢社会を支えるカギは何か。「ニューオールド」の力が欠かせない。

人にはその成熟の速さで「早熟」と「大器晩成」の両極がある。ほとんどの人は間違いなく「大器晩成」だ。いろいろなことに



関心を抱くタイプは、寄り道をしながらの大器晩成型である。いずれのタイプも、定年などの人生の枠を乗り越えて、まだまだ余力どころか活力がさらに高まっていく人々がいる。この世代に突入した世代の人々を「ニューオールド」と名付けたい。ニューオールドはこの先、40年も人生が残される可能性がある。これまでの社会の仕組みの中で、その能力が十分に発揮され輝かしく謳歌してきた人々のみならず、尖った才能ゆえ、逆に社会の中でその刃を削られた方々、あえて能力を抑えて控えめな人生を送ってきた人も多く存在する。前者には一層の弾みをつけて突っ走ってもらいたい。後者は、特にその刃を研ぎ直し、高邁なロマン、幅広く蓄えた

知識により、その個性で再度社会の改革に貢献してほしい。これからの対応次第で超高齢化社会の課題は、実は杞憂となるだろう。社会は成熟期を過ぎかけた段階からマンネリズムによる特徴的な惰性による活力のない緩んだ状況、競争力がなく、方向性を見失い、最悪の場合、崩壊してしまう状況に至る。これを打破しなければならない。

質の高い「ニューオールド」は毎年必ず創出され、新たな社会構造改革の貢献者となることが期待される。社会保障制度の中でそのまま眠って一生を委ねるのではなく、さまざまな経験を生かした判断力を用いた創業・創企画を目指すことが求められる。現在、専ら卓越した頭脳のエリートによるスタートアップなどの活性化が日本の新しい起爆剤として注目されており、私たちは無論、大いに期待している。この際、この若い「エリート」と「ニューオールド」の両極による「知的な革新的なパワー」が日本を再生させてくれる仕組みを作っていく必要がある。常にレギュラトリーサイエンスに基づく合理的な判断を怠りなく、比較やまねではなく絶対的な価値観で実行していく必要がある。それを支える戦略ヘッドクォーターが必要になる。そこには、「ニューオールド」の鍛え抜かれた経験が役立つことは間違いないだろう。
(次回は早稲田大学政治経済学術院副学術院長の深川由起子氏です)